

# 令和 7 年度 第 1 回浜田市総合教育会議議事録

日 時 : 令和 7 年 5 月 9 日 (金) 16:00~17:22

場 所 : 庁議室

構成員 : 久保田市長 砂川副市長

岡田教育長 杉野本委員 岡山委員 倉本委員 浅津委員

事務局 草刈教育部長 藤井教育総務課長 山口学校教育課長

石橋学力向上推進室長

## 議事

- 1 市長あいさつ
- 2 協議事項
- 3 その他

### 1 市長あいさつ

藤井課長

それでは、定刻になったため、令和 7 年度第 1 回浜田市総合教育会議を開催する。開会にあたり、久保田市長が挨拶する。

久保田市長

皆様、お忙しいところ、令和 7 年度第 1 回の総合教育会議にご出席いただき、ありがとうございます。

毎年度第 1 回の会議においては、昨年度を振り返り、まずもっているいろいろな分野でどういった状況であったか、あるいはいろいろな数字を拝見しながら、今後の活動についての相談をさせていただきたいと考えている。

従って、本日はレジュメにもあるが、令和 6 年度の教育課題に関するデータを基に、その振り返りを行いたいと思っている。その上で、今後どのように進めるかということを協議させていただきたいと思う。どうぞよろしくお願いする。

### 2 協議事項

藤井課長

本日は傍聴者の方が 1 名おられる。

この会は市長が招集して進行することになっているため、この後の協議事項については市長に進行をよろしく願います。

久保田市長

それではレジュメに従い、令和 6 年度の振り返りについてということである。その上で、意見交換あるいは協議を行いたいと思う。

資料の説明については、事務局から説明をお願いします。

それでは、私から資料1について説明する。

後ほどの質疑については、担当課長からお答えさせていただく。

この資料は、昨年の総合教育会議でお示した、学校教育に関する、全体が俯瞰できる、浜田市の状況について、数値を更新したものである。

最初に、1ページをご覧ください。これは浜田市の児童生徒数の推移である。

平成17年の市町村合併の後、5年ごとの数字を追っているもので、令和12年の推計値は、最新の数値に更新をしている。

平成17年当時、中学校と小学校で5,174人の子どもたちがいた。現在、令和7年では、中学校が1,191人、小学校が2,210人で、合計が3,401人となっている。この数字は、市町村合併した時に比べ、34.3%の減少という状況になっている。これが令和12年には、さらに45.6%の減少まで落ち込み、この時には合計が2,814人と、三千人を大きく割り込む状況になると見込んでいる。ちなみに、令和7年度に複式学級が存在する学校は、小学校4校である。

次に、2ページをご覧ください。

ここからは、毎年4月に行っている、小学6年生と中学3年生を対象にした全国学力テストの令和6年度の状況である。

最初は、小学校の教科の平均正答率の表である。左側に青で囲んでいる部分が浜田市の得点である。これが、県と国と比べてどの程度差異があるかということだが、県と比較したものが赤で囲んだところで、国と比較したものが緑で囲んだところである。大体3%から6%程度、浜田市の子どもたちが平均より下回っている状況になっている。

また、下の黄色い部分にあるように、前回の調査と比べ、県との差は国語がマイナス3.0ポイント、算数がマイナス2.0ポイント、国との差は国語がマイナス1.5ポイント、算数がマイナス0.9ポイントと、差が広がっている。国語では、読むことに大きな課題があると考えている。算数では、具体的な問題場面と数学的な表現との関連づけができていない児童が多いという結果が出ている。

続いて3ページをご覧ください。こちらは中学校の状況で

ある。

同じように見ていただくと、国語については3%から4%程度、数学については4%から8%程度、県に比べて点数が取れていない状況である。下の黄色の部分にあるように、国語、数学ともに前回調査に比べ差が広がっている状況である。国語では、必要な情報を適切に取り上げて要約することが課題である。数学では、各領域全体的に課題が見られるが、特に見出したことを表現するなどの、数学的表現の関連づけが弱い傾向にある。

次に4ページである。これは、小学校、中学校の正答率分布の表である。

棒グラフが、浜田市の子どもが取った点数であり、表は右に行くほど、国語で言うと、14問中14問正答があったということで、上位層ということになる。

折れ線グラフが、国や県の平均値となる。小学校、中学校ともに全問正答率の割合は、県とほぼ同程度となっているが、いずれの表も、上位層で、折れ線グラフに棒グラフが追いついていないというような状況で、高正答率層が少ないという状況は依然として課題となっている。

また、小学校、中学校とも、前回調査と比べて低正答率から中正答率までの層に入る割合が増えているということも問題である。低正答率者を中正答率層へ、中正答率者を高正答率層へ移行させることが必要となっている。全体として、学校ごとに正答率分布の状況に応じて対応を考える必要がある。

また、読解力育成のために、引き続き要約学習に取り組む必要もある。習熟度別授業の実施や、児童生徒一人一人の理解度、興味関心に合わせて、複数の学習活動が同時に展開される複線型授業の取組を推進する必要もあると考えている。

5ページをご覧いただきたい。これは、この学力テストと並行して行った意識調査で、学校の授業時間以外に1日当たり1時間以上勉強している数値を表したものである。

左側二つの表が小学校、右側二つが中学校のもので、上の表は浜田市と県、全国との比較、下の表は同じ浜田市の中で経年どう変化したかという比較である。

上の表において、小学校、中学校とも赤い矢印が左の方向に向いており、国や県に比べ学習時間が定着していないという状況が見られる。

下の表の経年比較では、中学校は前回調査より若干の改善が認められるが、小学校、中学校ともに令和4年度より下がっている。

また、小学校、中学校ともに、半数以下の児童生徒しか授業時間以外の学習を1時間以上していないというのが大きな問題である。

6ページをご覧いただきたい。こちらは、メディア接触の調査で、テレビゲームやSNS、動画視聴を1日当たり2時間以上行っている数値を表したものである。この調査は昨年度調査項目から削除されていたため、経年比較は令和4年度と令和6年度の比較になる。

テレビゲームでは、小学校は全国や県よりゲームをしている時間が長く、中学校では県より時間が長くなっている。資料のこの部分について、「中学校は全国よりも高い」となっているが、「県よりも高い」の誤りであるため、訂正をお願いする。

経年比較では、小学校、中学校とも、若干の改善が見られる。

しかしながら、SNSや動画視聴の経年比較では、小学校、中学校ともに2時間以上の割合が増加している。メディア接触は依然として課題であると認識している。

先ほどの、学校の授業時間以外の学習時間とあわせ、小中連携教育における各中学校ブロックでの取組を、各学校で共通実践することが重要と考えている。

続いて7ページである。こちらは浜田市のいじめの件数について、この5年間の推移を見たものとなっている。小学校、中学校ごとで見ると、毎年増減があるため判断はなかなか難しいところだが、合計の欄で見ていただくと増加傾向にあると言える。令和6年度の数値は、4年前に比べ36.7%増加している。

ここでのいじめは、客観的に見ていじめだなという判断ではなく、自らそう感じたものはすべていじめというふうに捉えている。いじめはその前兆を早く丁寧に見取って早期に対応することが重要であるため、今は先生方が見逃しをしないようにすることを目指しており、いじめゼロを目指すのではなく、いじめ見逃しゼロを目指している。

一方で、SNSなど、教員や家庭から見えにくいところでのいじめが顕在化していっており、それをどのように早く把握し早期に対応するかということも課題と考えている。

8ページをご覧いただきたい。これは小学校、中学校の不登校

者数の推移である。これもこの5年間では4年前の2.1%から令和6年度の5.0%に割合が増えている。

現在、不登校の対応については、過度な登校刺激はしないということで、その子の心の発達を待つという取組が中心となっている。そのため、家庭の外に安心できる居場所をどう作っていくかが課題であり、令和6年度から小学校2校に校内フリースクールを設置し、安心できる居場所づくりの試行を行っている。

次に9ページである。こちらは、特別な支援を必要とする児童生徒の状況である。

左上の表が特別支援学級に在籍している子どもの数で、この4年で23.9%増えている。右側が、通常学級に在籍しているが特別な支援が必要な児童生徒数である。こちらは4年で6%減っている。この二つを合わせたものが下の表になり、576人の子どもがそういう状況にあるということである。

このことに関連し、10ページに通級指導教室の利用者数の経年変化を示している。通級指導教室というのは、通常の学級に在籍しているものの、話したり見たり聞いたりすることに何らかの障がいを抱えていたり、あるいは学習面、行動面、情緒の面で特性を抱えている、例えば、じっとしていられなくて教室の外に飛び出す子どもなど、そういう子どもたちが、通常の学級にいながら、時間を定期的に取り出して、そこで個別の指導をするというものとなっている。通級指導教室の利用者は、この表のオレンジのところだが、ここ5年間は4%程度の割合で推移している。

11ページをご覧ください。こちらは、学校支援員配置の状況である。

浜田市では、通級指導教室を利用する子どもへの対応として、教員一人では、なかなか該当の子どもについて見るということができない。そこで、学校支援員をより多く配置し、先生方の負担を軽減している。そして、その子どもに寄り添う人が近くにいることで、安全安心を守っていくという取組をしている。

学校支援配置の事業費を1行目に記載している。このうち、令和2年度からはコロナ交付金ということで、コロナ対応のための加配があった。それを除いた実費、市費ということで、オレンジ色のところに記載している。この5年間では51.2%の増加になっている。コロナ交付金が入る前の令和元年度の事業費が、2,296万8,000円であった。そことの比較では、市費が90%以上増加

しており、決算と予算の差はあるものの、教育委員会としてはかなり力を入れてきたと考えている。

最後に 12 ページをご覧ください。これは、課題となっている教職員の働き方改革の一つとなっている、教職員の平均時間外勤務時間の状況である。

国では超勤を月 45 時間以内にとしているが、浜田市の令和 6 年度は小学校月 34 時間、中学校は月 44 時間という状況であった。一応、平均では目標はクリアした状況だが、時間外勤務時間は個々人で見ると必要もあり、引き続き注視しなければならないと考えている。

教員の業務量削減の対応として、学校としては、児童生徒の登校時間の変更や、中体連の大会など、市の予選をやめてブロック大会にまとめたり、あるいは市としても、留守番電話で業務終了のアナウンスを導入したり、部活動の地域移行にも段階的に取り組んでいる。

また、令和 6 年度から本稼働させた校務支援システムは、使い方に慣れてくる 2 年目以降に、より効果が出るものと期待しているところである。

以上、駆け足だが、学校を取り巻く浜田市の状況である。

久保田市長

大変多岐にわたっている分野のため、皆さんからご質問なり、あるいはご意見を伺いたいと思うが、ちょっと前段と後段を分けて説明したほうが良いと思うため、最初に 6 ページまでのところ、児童生徒数の推移、それから各教科の正答率や授業時間以外の学習、ゲーム、SNS、ここまでを一つの区切りとして、ここまでのところでご質問あるいはご意見があれば伺いたいと思う。そのあとで後段のところを、またお願いしたいと思う。

杉野本委員の方から、まず前段についてご質問、あるいは感想でも結構だが、いかがか。

杉野本委員

5 ページの授業時間以外の学習というのが、どちらかというと少なくなって減っていく傾向にあるというのは、ちょっと残念なところだなと思う。代わりに、ゲームの時間が小学校の方では増えてきて、中学校の方が、ゲームよりもむしろ SNS や動画視聴の方に動いているというところ、これは新しい動きになってきているのかなという気はする。勉強せずにというか、勉強する時間よりも少し SNS、動画視聴が増えているというのは、おそらく今の全国的な傾向からも言えていることかなとは思われるが、それを

久保田市長

超えるほどの学校の魅力というか、勉強への魅力が高まるようなものというのが必要になってくるのかなというような感想を持っているところである。

山口課長  
久保田市長

ちょっと関連して私の方から確認だが、動画やゲームとあるが、これは実際にはパソコンを使っているのか。あるいはタブレットやスマホ、何を使っているかわかるか。

基本はスマートフォンが中心である。

山口課長

今、小中学生はもうみんなスマホを大体持っているという状況なのか。

中学生は多くが保持している。小学生も一部持っていたり、何らかのネット環境があるため、ずっと見られる環境になっている。

久保田市長

しかし、小学生もゲームをやっているとか、SNS という回答をしているということは、スマホを持っていない子どももいるため、その子どもたちはいったい何を持っているのか。

岡田教育長  
久保田市長  
岡田教育長  
杉野本委員  
久保田市長  
岡山委員

ゲーム機を持っているのではないか。

ゲーム機。

そうである。

あるいは親のものを借りているとか。

承知した。その辺りも含めて岡山委員、続けてお願いします。

杉野本委員も言われたが、結局、授業時間以外の学習の時間は減っているが、ゲームをしたり SNS を見たりしている時間が増えているというのは、彼らが何に価値を感じていて、何が一番楽しいかというのを選んだ結果が、おそらくそういう方向に振れているのかなというふうに思う。学校や地域に出て何かをすることとかという以外に、ゲームや SNS というのはもう家で簡単に接続できて楽しめてしまうものである。大人も正直そうだなと感じるところがあり、家の外に出て何か活動するよりも、家で動画を見ているという大人も確かに増えているため、これは子どもだからとか大人だからというのが関係なく世の中の的にだんだんそうなっているのではないかなという傾向はある。

そうなったときには、それに打ち勝てるような、例えば地域活動とか、取り組めるもの、例えば野球をやっている子どもたちであれば、そちらに時間を振っているだろうと思うのがあると思う。彼らが何に価値を持って自分の時間を使っているのかというのが、ここからは読み取れるのかなというふうに思う。あと、授

久保田市長

倉本委員

業時間以外の学習の時間が減っているというのもあるが、都会地から引っ越してきた方等に言わせると、周りが塾に行っているから塾に行っているという状況が町の中で起こっているため、自分の意思で塾に行っているとか勉強しているというよりも、周りがやっているからという状況があるために授業以外の時間が延びているところもあると思う。必ずしもそれが必要ではない、みんながやっていないからやっていないというのもあるのかなというふうには思う。

今、児童生徒たちを取り巻いている状況が表れた結果というか、そんなに家で勉強する必要もないかな、授業以外で勉強する必要もないかなと思っているし、今の楽しいことはSNS やゲームなんだよということの表れであるため、地域側の私たちが、それを超える何か楽しいことを提供してあげないといけないかなというふうに、私は読み取らせていただいた。

はい、ありがとうございます。

続けて倉本委員、お願いします。

はい。学力テストの結果が出ているため、学力テストの数字を基にして、少しお話をさせていただきたいと思う。

小学校、中学校と見させていただいた時に、学力差がどんどん大きくなっていくと、やはり習熟度別の授業をするということは、上を伸ばすというのはすぐ感じられるが、中から下の方の子どもたちにとっても手厚い指導ができるという意味では、いろいろなレベルの子どもに対して対応できるということで、できれば、習熟度別をできる限り導入していった方がいいのではないかと考えている。

小学校について言うと、複式学級がいくつかあるが、これはやはりどう見ても、授業時間が実際には半分になる等ということになり、やはり格差が出ているなという感じがしている。またちょっと大きな問題になるのかなと思うが、複式学級を無くすにはどうしたらいいだろうかということを考えていけないといけない、子どもたちにそういう格差をつけるようなかたちではなく、格差を無くしてあげるようなかたちにするにはどういうふうにしたらいいのかというのは、やはり考えないといけないというふうに思っている。

それから、先ほどからスマホ等に傾いてしまうというのがあるが、特に中学生ぐらいになると、進路学習というものをおそらく

やっているだろうと思う。その進路学習というのは、自分の将来を本当に考えるところに繋がっているのかどうかというところで、中学校3年生になってから、もうちょっと勉強を頑張ろうかということではなくて、やはり、中学校1年生ぐらいから自分の将来をどうするのか、そのために、極端な話をする、今日一日どういう生活をしていくのかというようなところも考えさせながら、将来に向けて大きな目標を持たせるところがもう少し大事にされると、それが結果的には子どもたちの幸せに繋がる場所があるのではないかという気がしている。そういう進路学習にもう少し力を入れていくべきではないかというふうに感じている。

以上である。

久保田市長

はい、ありがとうございます。

続けて浅津委員、お願いします。

浅津委員

成績についてだが、ここには平均値で出ているが、個別で見えていくと、何年も継続して平均より低い点数の学校もあれば、逆に健闘して良い成績を残している学校も少なくないと思ったため、点数が取れていない学校というのは、学級づくりから、ちょっと苦労している傾向があるのかなと思っている。そのため、授業の内容以前に、まずは学級づくりへの手助けが必要かなと思っている。例えば、先ほど言われたが、習熟度別の授業であったり、ベテラン、中堅の先生を配置したりとか、そういったことができる体制が整えられればいいなと思った。

あと、先ほど言われたメディアだが、学校でできることには限界があるため、家庭での導きが大事なのかなと思っている。保護者も、今、子どもや学校の先生からどうなっているかというのを知り、PTA等にもその啓発に協力してもらおうとか、あとは最近、学校の外のことは家庭の責任ですというふうに、ちょっと意識を変えてきているのではないかなと思うが、それがまだ保護者とは共有できていないような気がしている。タブレットも1人1台あり、勉強できる材料は揃っているため、家庭での学習、過ごし方について、保護者もしっかり関わってもらうように啓発ができればいいのかなと思う。

以上である。

久保田市長

今、いろいろな意見があつたが、教育長いかがか。

岡田教育長

まず、学力テストに関して言うと、私も全部の問題を自分なり

に解いてみた。その時に、問われているのが、やはり論理的な思考が求められているなということと、ある程度条件を決めた中で自分の言いたいことをまとめて書くという力というのが本当に問われているなど、これは教科を問わず実感した。

これは教育委員会でも分析はしているが、今、要約学習に力を入れようとか、それから算数、数学の研究授業に力を入れる等している。これも少し続けてきていることもあるが、やはり方向感としては間違っていないのではないかと考えており、定例教育委員会の会議の中でも、そういう取組について、各委員方も概ね方向性についてはいいのではないかと考えている。

ただ、限られた時間の中でやはり問題を解く習慣、数多く問題を解くところの弱さということがあるため、それをやるためにどうするかといういろいろ考えて、今年はAIドリルも入れてみようじゃないかということがあったり、それから、やはり正答率を見ても、高位層と低位層に二分化している状況、これは何とかしないといけないのではないかと考えており、少人数の指導であったり習熟度別というのはやりたいが、それをやるためには、やはり先生が必要である。そこで専科担任のできる先生の枠を何とか要望して取ってきて、その先生がもうおられない、教員不足という本当に深刻な問題があり、なかなかできないが、そこを何とか習熟度別なり少人数の授業が展開できるようなサポートというのは、本当に必要なのではないかと考えている。

あと、授業以外の時間の学習について言うと、一つだけ、これは部活動の地域移行の際に、子どもたちにアンケート調査を取ったところ、塾とかに行っている子どもの割合というのが、他の地域に比べてかなり低い、全国的に比べてかなり低いということがわかった。おそらくこの授業時間以外の学習の中にはそういった時間も含まれていると思う。そういった背景もあるのではないかなというふうには見ている。

副市長、いかがか。

私は教育のことにあまり関わっていないため、素人的なことになるが、先ほどの話を聞いていて、今、学校で子どもに宿題というのはどう出ているのかなと思った。私たちが子どもの時は宿題をこなし、次の日に持って行って、やっていないと叱られるということで、否応がなく勉強していたところもあるが、今、宿題というのがどういうふうになっているのか。やらなくても別にそれ

久保田市長  
砂川副市長

|               |                                                                                                                                                                                                                                 |
|---------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|               | <p>はいいというようなものなのか、それともやっていかないと困るからやるよというような、その辺り、現場はどういう状況なのか教えていただきたい。</p>                                                                                                                                                     |
| 石橋室長          | <p>私は３月まで小規模校に勤めていた。宿題は出している。ただ、宿題の中身については、反芻的に漢字を覚えるとか、計算ドリルをやっていくというものだけではなく、自分で興味関心のあるものを調べてまとめていくという調べ学習も、宿題として出したりしている。また、タブレットを持ち帰って、タブレット端末のできる課題を自分で見つけてやってくると、そういったかたちで、中身的には変わっているが、宿題そのものは、どの学校でもどの教室でも出していると思う。</p> |
| 砂川副市長         | <p>それは次の、例えば登校日に、やっているかやっていないかというチェックをするということか。</p>                                                                                                                                                                             |
| 石橋室長          | <p>私は校長として毎朝、おはようと言いながら全学級を回っていたが、必死で宿題をやっている子どももいたため、チェックは入っていると思う。</p>                                                                                                                                                        |
| 砂川副市長         | <p>先ほどの、家で勉強せずにゲームや SNS をする時間がどんどん増えていることは、宿題がもしあれば、どういう具合にやっているのかなという、そことの兼ね合いに興味があったためお尋ねした。</p>                                                                                                                              |
| 石橋室長          | <p>先ほどからも話題に出ていたが、学校や学級での落ち着き度合いによって、その宿題の取組が変わっているため、自分で工夫して一生懸命やっている子どももいるし、そうでない子どももいるという状況である。</p>                                                                                                                          |
| 砂川副市長<br>岡山委員 | <p>ありがとうございました。</p> <p>賢い子は、もう休み時間に宿題をやり、家に帰ったらもう遊ぶんだと決めてやっている子どもたちも中にはいるため、それがそのまま家庭での学習時間に反映されているかということ、それはそのままではないかなと思う。</p>                                                                                                 |
| 砂川副市長         | <p>どこかでそのプラスアルファの勉強をすれば、それはプラスかなと思った。家でやらなくても。</p>                                                                                                                                                                              |
| 久保田市長         | <p>先ほどの話の中で、岡山委員からあったが、勉強するよりは SNS やゲームの方が楽しいんだと、それを変えるにはどうしたらいいのかなという思いがある。私の孫は都会にいますが、小学校からもう周りが塾に行くからもう行かざるをえなくなり、学校の宿題だけではなくて塾の宿題もある。そうすると、どうしても勉強</p>                                                                      |

せざるをえなくなっているため、ゲームなどは、親に聞くと1時間までは許すけどみたいなことで、コントロールせざるをえないと。しかしこちらは、先ほどの説明であれば、塾に行っている人も少ない、学校の宿題のボリュームがどの程度あるかわからないが、やはり余裕があるために楽しい方を選んでしまうという、そこを変えるにはどうすればいいか。

先ほど、もう一つ気になったのは、倉本委員からもあったが、自分の将来に向けてのという、私も時々小学生の前で、なぜ勉強するのという講義をさせてもらっていたりするが、要するにその勉強しなければいけないというモチベーションというか、そこからまず何かやらないといけないと思う。私の場合、キャリア教育の一環で、勉強しないと、お医者さんになりたい、でもお医者さんになるのは大変なんだよと、勉強しなければいけないんだよと、あるいは学校の先生になりたい、そのためには大学に行かないと学校の先生になれないんだよという、そういう話をしてあげると、「へえ、そうなんだ」と小学生たちは思うが、やはりその辺りから何かこう、勉強しなければいけない、何のために勉強するのというところからやらないといけないのかなという気がする。それが無いから、今楽しいことに没頭してしまうというか。

倉本委員、いかがか。

倉本委員

全くそのとおりだと思う。同じようなことだが、非常に残念なのは、例えば高校の例で言うと、ある大学を目指していて、これだけの力が必要です、これだけの勉強をしないといけないねという話をすると、ちょっとしんどいのでやめますとか、今の子どもは結構そういう傾向があるため、ちょっとやはり残念だなあという思いがある。その辺りを、助け船を出しながらやるが、やはり弱いというか、楽な方に流れる傾向がどうも強いなと感じている。そこはやはり市長が言われたように、自分の将来を考えると、周りからそういう刺激があるとか、そういう中で生活していないため、どうしてもやはり、この地域の子どもは、そういう意思が弱いなという感じはしている。それを何とかしろと言われるとなかなか難しいところではある。それを何とかしようと思って努力はするが、難しいなというところがある。

久保田市長

ちょっと別の話になるが、島根大学医学部の地域枠には10人ほど枠がある。松江、出雲を除く県西部、それから離島、中山間地の島には10人ほど地域枠ということで、地域の医者になりた

いという人を募集している。

ところが、浜田からその地域枠に手を挙げる子もないし、その地域枠に手をあげても不合格ということで、2年連続ゼロである。

今までは大体2、3人はいたが、このままいくと、医者になりたいという人が少ないということもあり、それから、受けても受からない人もいる。そのため、学校の校長、高校の先生に言うと、いや中学校の頃からの教育をしたいという人もいるし、そうすると、例えばということで今、医者の話をしたが、その他の医療従事者、なり手が少なくなったり、だんだんこう、将来この地域を支えるような人材育成という観点からも、ちょっと心配だなと思う。すると先ほどの、将来こういうことになりたい、こういうことを目指したいという、そこからやらないといけないのかなという気もするが、教育長いかがか。

岡田教育長

キャリア教育の重要性というのは、もう前からずっと言われてきており、学校の方でもやります。ただそのやり方については、やはりちょっと考えてみる必要あるかなと思っている。選択肢をとにかく増やしてあげるといような考え方に立って、いろいろなところに出かけていったり職場体験などもしていくが、社会を知るといことには繋がっていくかもしれないが、もう少し深掘りして、自分のなりたい職業なり、特にこの地域で一番の課題である医者であるとか、地域医療を守るためのそういう人たちを見て、なろうと決め、そのためにはこれだけのことをやらなければいけないんだなという気づきの部分をどうしていくかというのは確かに大きな課題ではないかなと思っている。

キャリア教育には力を入れているが、どこかに特化して、そういうものを充実させていくかどうかということ、それも考えていく一方で、子どもたちの自主性というか、そこも教育委員会としては大事にしているため、どう気づく場面を用意するかということではないかと思う。

久保田市長

医療関係者から、何とかしてもらえないだろうかというのがあるのは、医者や歯医者は、みんな想像つく仕事だが、それを支えているスタッフ、看護師もそうだが、例えば歯医者に行けば歯科技工士だとか、歯科衛生士だとか、そういうことを希望する人があまりいない。

島根県内にはそういった学校がない、あるいは少ないという中

で、そこを育てないと、この地域で医院や歯科医院を開業したとしても、スタッフが揃わなくてという問題があり、その辺りのキャリア教育も何とかやってもらえないだろうかということを、実は言われている。

今、医者や医療従事者は、市の縦割りでいうと健康福祉部だというのが、動機付けするのは教育委員会等で、やはり中学生や高校生、中学、高校が重要になってくるのかなと思っている。そういうのをちょっと今、問題を投げかけているところである。

まずはそういう仕事をやってみたいというのがないと、それに向かって勉強しようとか、その学校に入ろうということにはならない。そのため、その辺りの動機付けからが重要なのかなということも考えている。

今のテーマで、委員方いかがか。

浅津委員、何かご意見等あるか。

浅津委員

一昔前は、成績がよければ、医者になれたらいいねというような考えもあったと思うが、最近では、医者はブラックだよねということ子どもたちが言っている。そのため、魅力をあまり感じていないのだろうなと思っているのと、早い段階から進路を意識すれば勉強するようになるのではないかと、私もちょっと前まで思っていたが、今の子どもたちは、早いうちから進路を考えて、より専門的な高校に行こうという子が一定数おり、ちょっと増えている気がする。早く社会に出るために商業高校に行こうとか、工業に行こうとか、あとは県外の、もっと就職に直結するような、ちょっと専門学校的な高校に行くような子どもが増えており、これからもすごく増えていくのだろうなと感じていて、ちょっとそれをどうしたらいいのかということころまでは、何とも言えないが、その傾向は今から強くなるのだろうなと感じている。

久保田市長

専門学校の部分で言うと今、高校の無償化などの話がある中で、いろいろな識者が指摘しているのは、逆に専門学校行く人が少なくなるのではないかとということである。専門学校は公立の学校が多い。私立に人が取られてしまうと、公立の、いわゆる工業高校とか、そういう高校を選ぶ子どもは少なくなっていく。都会だけの話かもしれないが。

このテーマばかりやると時間が無くなるため、ちょっと答えは出ないが、教育長、よろしくお願いします。

後段の方の7ページ以下のところで、杉野本委員から願います

る。

いじめの件数がかなり増えてきている。これはいじめをキャッチする、そういうアンテナが敏感になってきていることもあると思う。児童生徒数が減る中で、このいじめの増加率は高いかなという気がする。それから、次の不登校者数だが、4年間で2倍以上になっているというのを、どうなのだろうかと思った時、先ほどの学力調査の結果からだが、低正答率から中正答率の子どもが増加している。いわゆる、クラスの間どころがみんな、勉強よりも勉強じゃない方に興味がいき、面白くないと学校に行かない。その原因の一つは、いじめが増えていているというふうな、何か関連づけて考えることはできないかなと思ったりしている。そうしてみると、本当に学校が子どもたちにとって魅力ある場所になっているのだろうかということがちょっと気になる。

令和5年度からだろうか、全国学力調査の質問紙調査の中に、学校に行くのが楽しいと思いますかというような、そういう調査が入ってきているのか。たしか、何かの冊子を読んだ時に、そのようなことがあるようで、その辺りの結果が、浜田の子どもたちはどうなのだろうかというのは気になっている。それから、ゲームよりもむしろ SNS だとか、そういった動画というのは、結局、誰かが何かをしているもの、あるいは、いろいろな身近なところでの活動みたいなものを見たいということになると、1人でゲームをするよりも、人との関わりを求めているのではないかなというようなことも、ある意味そういう子どもの声なのかなというふうに受け取れないことはないのかなという気がする。

国の教育振興基本計画には、ウェルビーイングというのか、心身ともに満たされた状態というものを、環境として作っていくというのを大事にしていくというのが、指針の一つにも入っているというのを見た。学校教育だけではなく、子どもたちを取り巻いていく環境そのものが、子どもたちが安心してできる状態にしていくことが大事ではないかなと思う。

例えば、学校であれば、学校訪問した時に、制服の選択肢を拡大するという学校があった。その学校は中学校だったが、生徒が非常に生き生きとして、いろいろな生徒会活動なりに取り組んでいた。自分たちが学校を動かしているという、そういう主体的なものを持っている。そういう自分たちでやることによって、何かうまくいくんだというところが、なんというか、目に見えない不

安だとか、重圧だとか、いろいろなプレッシャーとかそういったものを取り除いていく、解消していくことに繋がっていくのではないかな。そういうような、ちょっと選択肢を広げるだとか、そういうこともあるであろうし、学校行事というのは、あのようコロナ禍があり、働き方改革の中で、かなり削減されてきているが、学校生活への潤いを作るものでもあり、子ども同士、子どもたちの関わりを深めていくものであるとするならば、そういったものは、ちょっとメリハリをつけるにしても、充実させていく必要があるのではないかなと思う。

ただ、一番は、今年度から浜田市でも取り組んでいくコミュニティスクールのところで、期待していききたいなと思う。それは、地域の方々も子どもたちにそういう安心感や自信を持たせる大きな力になってもらえるなら、そういった気持ちの安定に繋がれば、いろいろな部分で、ちょっと心配な数字が増えている分が減っていけば、学級も落ち着き、いろいろなところで学力にも好影響が行くなら、それはそれでいいかなと思う。

そのためには、行政の方からそういうまちづくりセンターなり、地域の方々への大きな働きかけをして、積極的に支援をしていく必要があるなと思った。

以上である。

どうもありがとうございます。

続いて岡山委員、お願いします。

後段のところでは、不登校とかいじめの問題であるとか、特別な支援を必要とする児童生徒の状況というふうにあるが、だんだんと、子どもたちには特性があるということが、社会的にも認知されてきたかなというふうと思う。自分でまだ自分というものが定義できていなくて、このコントロールしようのない気持ちをどうすればいいんだろうみたいなことを抱えながら大きくなった子どもたちもいると思うが、本当にそういう子どもたちは、生まれながらに持った特性をそのまま持ったまま、小学校や中学校へ上がっていくわけだが、途中でやはりちょっと何かの支援が必要なのではないかなというタイミングはたくさんあると思う。

乳児健診であるとか、就学前の健診であるとか、そういうところであると思うが、そのところで適切に支援ができる仕組みがないと、これをまだ認めたくない親、保護者というののもいるため、そのバランスは難しいと思うが、やはりその支援がないことに

久保田市長

岡山委員

よって、よくない方向に走るというか、そういったことは本当に避けたほうがいいだろうなというふうに思う。大人側が、いや、これはわがままでやっているだけだとかいうふうに、いまだにそういう誤解みたいなものがあるため、それはもう生まれ持った特性だからどうしようもないが、それを持った状態で、彼ら彼女たちが健やかに生きていくため、本当に生きていく力をつけるためにはどうすればいいのかという支援を、児童生徒が少なくなっている今だからこそ、ひょっとしたらそこは手厚くできるのではないかなというふうに思っている。特性のある児童生徒への支援と、あと大人側の、そういったことへの認知度を上げることも、世代間によっても全くその、特性を持った子どもたちがいるんだよということが、いや、ただのわがままだとか、何か極端にこれができないからだめなんだみたいなのは、いまだにまだ空気としてはあるかなと思う。大人側の教育も必要であり、それにはやはり支援を入れた方が、本人のためになるのであればやっていこうよという空気があると、全部を学校任せにしない状態になるのではないかなと、本当に総がかりでやっていく必要があるのではないかなと思っている。

久保田市長

今の部分は後ほどまた教育長、見解をお願いします。

続けて倉本委員、お願いします。

倉本委員

2点ほど。小中学校の不登校者という数が、残念ながら増えてきてしまったというところだが、今までの経験で言うと、子どもも苦しい、しかし、それを見ている親がやはり苦しいのではないかなという気はしていて、特に小学生の低学年ぐらいの親御さんがそういう状態になったときには、やはり親もわからない、子どももわからないだろうと思うが、不登校の子どもさんを持った親同士で何か話せるような場が設けられることができればなあと、自分の悩みをもうフランクに伝えられるような場があると、親御さんにとってはおそらく楽なのだろうなという気がしている。それを克服したような親御さんがおられて自分の経験を話してもらえたり、悩みを聞いてあげられるような機会があると、ちょっと楽になるかなと思う。親も子どもも緊張しながら、気を遣いながら、その不登校の子どもを見ているところがあるため、そういう機会があればちょっと楽になるかなと思っている。

それからもう1点は、教職員の時間外勤務が、減ってきていると言えば減ってきているのだろうと思うが、何か物理的にこうい

う時間を省こうとか、無くそうとかということで、教育委員会の方もいろいろな手を打ってこられているが、常を感じるのが、教員と生徒を離してもいいかという、離してもいいかというのは、別々にして、言葉は良くないが、ここまでは教員がやるがここから先はもう教員は手を出しませんよというような傾向が何か強くなってきているような気がする。本当は、やはり教員と子どもが接する時間が多ければ多いほど、これもやはり学校の魅力にも繋がってくところがあり、もう最近の流れではないかもしれないが、自分を犠牲にしても子どもの面倒を見てあげるとかというところがかなり線引きをされてきて、こういう先生のところへ近づきたいけどもなかなか近づけない、もう時間で切られてしまうとかというような、合理的な流れになってきており、ちょっとやはりそこは残念だなと思う。

例えば、部活の負担というのは、少しは軽くしてあげてもいいと思うが、やってはいけないというようなところにならないように、できる人はできるだけ子どもと相手をするというような方向、猶予は残しておいてあげた方がいいのかなという気がする。

ちょっとまとまりのない話だが、以上2点である。

はい。

では続いて浅津委員、お願いします。

不登校についてだが、理由は本当に様々で、最近は保護者からも子どもが朝起きられなくなったという話を聞くことがすごく多く、成長の過程で自律神経が乱れるのか、もしかしたら夜ふかしによるものなのか、あとは、先ほど岡山委員が言われたように、特性によるものもすごく多いのではないかなと思っており、その辺りメディア接触の時間の増加等にも一因があると思うが、本当に理由は様々、いじめだけではなくいろいろな理由があると思う。早い段階で、学校に行かないという判断をされる親御さんが増えており、それは子どもを守るためだが、問題は、学校に行かない間、子どもがどう過ごしているかだと思う。保護者も含めて一番気にしているのは勉強のこと、勉強が遅れてしまうのがすごく心配だと皆さん言われており、欠席が長くなると、勉強が遅れてさらに不安を感じて、学校から足が遠のいていくのが心配だと皆さん言われるため、学校との繋がりが少しでも感じられるように、例えば、皆タブレットを持っているため、先生が板書したものをタブレットに送ってもらうとか、そういった学校との繋がり

久保田市長

浅津委員

が感じられるような取組が増えるといいなと思った。

不登校については、選択肢が増えたというふうに考える保護者さんも多く、その中には、行きたいけれども行けないという方ももちろんたくさんおられるため、そういった方にはしっかり寄り添える体制が必要であるし、そういったことができる先生の余裕も必要なのかなと思う。

先ほど倉本委員が言われた、親の苦しみ、学校に行かなくなったときの親の苦しみというのは、本当に痛いほど伝わってくるというか、少し話を聞いただけで、こんなに楽になるとは思わなかったと皆さん言われるため、それだけ情報がないというか、どこに頼っていいのかわからないのだなというところが、逆にこちらが驚いてしまうというか、いろいろな支援の施設もあり、親の集いとか、そういったサークルなどもいろいろあるが、やはり、ある日突然子どもが学校に行かなくなると、何も情報がないため、本当に皆さん驚いてしまい、本当に右往左往されて、その時期の親御さんは本当に苦しいと思うため、情報発信をもう普段からというか、不登校に関係ない、そういったことに全く触れてない人にも情報発信をしていけば、少しは親が楽になれるかなと思った。

以上である。

久保田市長

今、親の視点からというのが倉本委員、浅津委員からあったが、その親御さん、不登校の子どもたちの保護者が相談し合うとか、話し合うとか、そういう場はあるのか。

岡田教育長

それは今年から新しい取組としてやろうとしていて、そういう保護者の皆さんが集い、情報交換や意見交換ができるような場を用意しようという予定で今考えているため、それをちょっと詳しく説明していただけるか。

山口課長

3月議会でも、議員方からこういった不登校の親御さんの意見交換なりの質問があり、教育委員会も今、やまびこ学級という教育支援センター、不登校の子が学校外で通える教室を持っているが、ここに通所する保護者と、スクールソーシャルワーカーが関わっているご家庭を希望により集めて、意見交換や悩み相談の場を近々設定する予定である。まずやってみて、反響を見て、またどうするかは考えていきたいと思っている。

久保田市長

それは具体的に、例えば何曜日の何時ぐらいとか決まっているか。週に1回とか毎日とか、今考えている案で言うとうかが。と

|       |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
|-------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|       | <p>いうのは、親御さんも働いている人が結構多い。そのため、不登校の子どもなり、その意見を言う場を設定する時間や曜日、そこも考えないといけないだろうという気がするが、どのように考えているのか。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
| 山口課長  | <p>今考えているのは夕方の段階を予定している。やまびこ学級に通所している子どもたちは、結構ご家庭の支援で、通学の行き帰りを送迎していただいているため、まず時間があるご家庭というふうに理解している。やまびこ学級が 14 時に終わるため、そのあとから夕方にかけて設定しようと思っている。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
| 久保田市長 | <p>週にどれぐらいの頻度で考えているか。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
| 山口課長  | <p>できれば月 1 回ぐらいはしたいと考えているが、問題は、誰が聞き手になるかいうところも正直ある。集まってもらい、さあどうぞお話しくださいではなかなかできないため、そこはスクールソーシャルワーカー等、ファシリテーター的に話を持っていく場を設定しようと思っている。ちょっとそこは今、具体的には、まずやるということまでである。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                    |
| 久保田市長 | <p>期待をしておられると思うため、ちょっといろいろ詰めていただきたい。なかなか運営が難しい部分もあると思うが、よろしく願います。1 回会っただけでは本音でなかなか話ができない、ある程度、何回かやっているうちに本音で話ができるようになると思うため、時間が必要だろうと思う。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
| 岡田教育長 | <p>教育長、今いろいろ両委員からあったが、いかがか。</p> <p>まず子どもの特性についての話が出たが、学校でも人事異動の際にいろいろヒアリングした時、いつも要望として出てくるのは、特別支援についての理解がある先生を配置して欲しいということである。学校としても、やはりその辺りの意識というか、考え方を持った人に来てもらいたいというぐらい、学校にそういう配慮を必要とする子どもが増えている。同じように、私は保護者の方にもそういう考え方等が広まっていくといいとは思っているが、具体的にどう伝えていきますかというところは課題だと思っている。</p> <p>一方で今、今年はこども基本法があり、浜田市でもこども計画を作り、その中でまず子どもにしっかり寄り添いましょう、子どもの意見を聞きましょう、自主性を育みましょうということをみんなでやりましょうということを、先日 PTA 総会でもちょっとお話をいただいた。そういう中で、一方的にしつけと称して、</p> |

上から言う、そして、自分の経験とちょっと違うようなことは排斥して叱りつけるというようなやり方は、ちょっと違うのではないか、考えてみようよということに意識が広まっていけばいいと思っている。こども基本法の実施に合わせて、そういう考え方が広がるような研修であるとか、そういったところも取り組んでみてもいいのではないかとと思っている。

ただ、なかなか本当に聞いて欲しい人がそういうところに出てこられるかどうかというのがあるため、これは地道にやっていくしかないと思っている。まず学校の先生方に、改めてそういう見立てをしていただきながら、学級懇談やいろいろな場面で保護者の方に伝えていただきながら、ちょっと子どもの見る目というか、少し視点を変えてみませんかというようなことを広げていくことが重要ではないかとは、今思っている。

それから、不登校の数が確かに増えているが、年間 30 日以上欠席すると不登校という定義がある。いきなりそこが増えたかという、実は 20 数人ぐらいの子どもは、去年までも結構いたと思う。それが今回、ちょっと数日増えて 30 日を超えたということが多いという分析を、教育委員会ではしている。そのため、その数日増えたところが何なのかということは考えていかなければいけないが、いずれにしても、この中学校で 8% の割合がいるということは、今 40 人学級だと各クラスに 3 人ぐらい不登校の子どもがいる計算になるため、ちょっとこのままでは何か対策をとらなければいけないかなと思っており、そのためにはやはり居場所だと思う。授業に向かえなければ、まず学校に来てみるとか、学校に行けないのであれば、地域にどこかの居場所を作って周りの人が支え、ちょっとエネルギーを貯めるとか、そこはこれから力を入れていく必要があるのではないかなと思う。

久保田市長

今教育長からあったが、委員方から何かあるか。さらに追加で聞きたいこと等、いかがか。

杉野本委員

今、やまびこの方にはスクールカウンセラーは行っておられるか。

山口課長

特に行ってはいない。

杉野本委員

今の保護者との相談というか、しっかりそういう機会があれば、それはそれでいいと思う。実際、まだやまびこに来られる子どもというのは、それなりに何か学ぶ姿勢を持っているとすると、何かもやもやの部分、来た時にでも、本人の了解が必要だ

が、保護者の了解もいるかもしれないが、そういう場でも、もし必要な子がいるようであれば、そういう場を作ってみるのもいいのかなと思う。

去年の統計だったか、文科省が把握している不登校の理由というのは、学校が調査して教育委員会が集め、それを県に報告して全部文科省、国へ行くと思うが、県教委が、宍道高校と浜田高校の定時制の生徒を対象にして、小学校、中学校時代に不登校になった理由を聞いた部分を、実数的にそんなに多くないかもしれないが、その文科省の結果とはかなり違っているような、なかなか子どもは、その時には、小中学校だけなぜ休んでいるのか、自分自身もわからないのかもしれないし、あるいは、本音が大人には言えないということで、何かそこを吐き出すところが、機会があるなら、そこで、いわゆる教育者、あるいは大人が思っている理由ではないこともいろいろあったり、本当は先生が嫌い、学校が嫌だが、これは言うてはいけないなという、その辺り子どもはわからないため、そういったことは出さないで、何となくとか無気力とかというところで理由を持ってくることもあったりすると思う。その辺り、その子どもたちの本音を聞くことができれば、そこで何か、それによって学校がどう変わっていく必要があるのか、教員がどう変わっていく必要があるのか、あるいは大人がどう関わっていく必要があるのかということもヒントになることもあるのかなと思い、もしそういう場が持てるのであれば、あってもいいのかなと思った。

久保田市長

浜田高校の定時制の、中学の時を振り返って不登校がどうだったのかという、そういうのは、オープンになっているか。

倉本委員

いや、オープンにはなっていないと思う。

久保田市長

確かに子どもたちの本音と、学校の先生のもとに集まったデータには何となくずれがありそうな感じがする。なかなかこれも難しい問題だが。教育長、よろしくお願いします。

岡田教育長

一緒に、教育委員方にも教えていただきながらやっていきたいと思う。

久保田市長

とりあえず振り返りのところで、皆さんにお聞きした。

何か言い忘れたことなどがあれば、お願いします。

岡田教育長

倉本委員からちょっとご指摘いただいた、教員の働き方改革を進めることが、子どもと教師の距離を逆に作ることにならないかということである。

|       |                                                                                                                                                                                                                                                                          |
|-------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|       | <p>元々、校務であるとかいろいろな先生の負担を軽くして、その分子どもと向き合ってもらおうというものが大前提としてあるため、そこは今一度、学校現場にもしっかり伝えていく必要があると思っている。</p> <p>あと、部活動についても今、地域展開をしようとしているが、当然学校の先生方にもそれに燃えている先生もおられるため、そういう先生は、学校活動ではなく、その地域活動の中で指導していただく。希望を取り、そういう希望のある人は、関わってもらえるような仕組みというのは、しっかり考えていく必要があるかなと思っている。</p>     |
| 久保田市長 | <p>昨日の中国市長会で、部活動についての意見交換もあり、取り組んでいる自治体、事例もあったため、参考にしてもらえればと思う。</p>                                                                                                                                                                                                      |
| 各委員   | <p>振り返りのところはこれでよろしいか。</p>                                                                                                                                                                                                                                                |
| 久保田市長 | <p>特になし。</p> <p>それでは、次のテーマで、今年度の第2回のテーマを何にするかということ話し合いたいと思う。</p> <p>まず委員方から、このテーマでやってはどうかということがあればお願いします。</p>                                                                                                                                                            |
| 杉野本委員 | <p>杉野本委員から、もしご意見があればお願いします。</p>                                                                                                                                                                                                                                          |
| 久保田市長 | <p>ちょっと考えさせていただきたい。</p>                                                                                                                                                                                                                                                  |
| 岡山委員  | <p>では岡山委員、いかがか。</p> <p>取り上げるかどうかは別として、島根県の西部地区でカタリバというプログラム、あるいはカタリバに似たプログラムを導入している学校がだんだん増えてきている。最初は高校でやっていたものが中学に下り、中学でやっていたものが小学校にも下りてというのが広がっているという例を聞いたことがあるが、それを行うことにより、結局子どもが心の内を打ち明けやすくなるような効果がありますよといったことを聞いたことがあるため、他市の、他の地域の特化した事例等を取り上げて話をするのがいいのかなと思った。</p> |
| 久保田市長 | <p>カタリバというのは今、市内ではやっているか。</p>                                                                                                                                                                                                                                            |
| 岡田教育長 | <p>やっていない。益田ではやっていたか。</p>                                                                                                                                                                                                                                                |
| 岡山委員  | <p>カタリバというのが、ちょっと文言が使えなかつたりするため、いろりプログラムのような名前に変わって続いていたりと、結局益田のものが川本に飛んだりとか、やっている主体は同</p>                                                                                                                                                                               |

久保田市長  
倉本委員  
久保田市長  
浅津委員

じだが、じゃあ川本で導入してみようか等ということが少しずつ広がってきている。私もちょっと参加させていただいたりしたことがあるが、すごくよかったなと思った。

倉本委員、いかがか。

特に思いつかない。

浅津委員、いかがか。

先ほど倉本委員が言われた子どもと教師の距離のところ、働き方改革で生まれた時間が、時間が生まれたのかどうか、それがどうプラスになっているのか、むしろマイナスになっていないのかというところは、ちょっと知りたいなと思うが、大きなテーマではなくてもいいかなと思う。

久保田市長

ありがとうございます。

杉野本委員、いかがか。

杉野本委員

まちづくりセンター辺りの取組は、年度末のところで発表を聞かせてもらっているため、地域の、子どもを育てる意識というのは上がっていると思うが、その辺りが、コミュニティ・スクールが始まる中で、何かそれと関連づけてまちづくりセンターの役割というか、関わり方辺りが、自分が社会教育的な部分が弱いだけに、ちょっと教えてもらえる機会があるといいかなという気はした。

久保田市長

ありがとうございます。

事務局の方は案が何かあるか。

岡田教育長

事務局というか、私が個人的に思っているのは、今本当に少子化で子どもの数が激減している。そうした中で、子どもたちにとっての適正な学校規模であるとか学校の配置については、ちょっと議論を深めていかなければいけないのではないかなと思っている。それで今、本当にいろいろな教育課題があるが、学校自体も老朽化している学校も増えており、それから、学校や体育館のエアコンをどうするかという話があるが、今の学校規模のまま、本当に入れるのはどうなのというようなこともある。それから、部活動にしても、中学校の子どもが少なくなると団体競技ができにくくなっているということがある。やはり学校の規模と、子どもたちにとっての本当のよりよい教育というのは関連があると思っている。他の県内の自治体でも、そういう学校の適正配置であるとか統合再編なども含めての議論もかなり始まっているため、どうするかということより、方向感とかいろいろなことについて

久保田市長

は、1 回議論してみてもいいのではないかなという気持ちは持っている。そこはやはり避けて通れないのではないかなという思いがある。

それから、テーマ的なもので言うと、今、総合振興計画や教育振興計画が、ちょうどこの秋以降に策定に向けて動き出すわけだが、そこで、浜田市の教育をどういう基本理念を持ってやるかとか、教育大綱をどう位置付けてやるかというのは、ちょうどこの総合教育会議の中でも 1 回揉まなければいけない。そういう、この会議自体の決まり事があるため、そこについてもどこかのタイミングでやる必要があると思っている。

その 2 点ぐらいが、テーマとしてはどうかと私自身は感じている。

昨日たまたま中国市長会があり、私の方から、浜田市からの意見交換会のときのテーマで、公共施設やインフラが老朽化している問題について、それぞれ学校を建て直すにしても、あるいは水道管の老朽化にしても、随分お金が要る。これについて意見を求めたところ、学校の建替えについて、結構いろいろ皆さん悩んでおり、こんなことをやっているよという意見もあった。

やはり、少子化がものすごいピッチで進んでいるため、人口減少、少子化の中で、従来型の学校の、老朽化してから建て直すということではなく、もっと複合的に何かやってみるとか、学校だけではなく、そこに何か別の機能も加えさせるとか、いろいろなことを考えた上で、少子化はもう所与のものとして、そういった中で、学校の建替えなどもどうするかということを考えないといけないという、簡単に言うとそういうような議論であった。

そういう意味では、教育長からもあったこの問題を、どこかでしっかり議論しておいたほうがいいかなという気もするため、そういうテーマでもいいと思うが、委員方はいかがか。

学校は、浜田市の場合は築 50 年になれば建て替えるというのが、一応基準としてある。そうすると、今手元に数字を持ってきたいないが、あと 20 年以内に、小中学校 25 校中の 10 校ぐらいは建て直さないといけない。そのため、一方では少子化も進んでいる中でどうするべきかという議論、ちょっとかなり大きなテーマにはなるが。教育委員会でも、その辺りの計画を作らないといけないというミッションもあるのではなかったか。

岡田教育長

統合再編計画というのは、今までは大体 10 年に 1 回ぐらいの

スピード感で作っていて、令和4年の10月に今の統合計画ができて、雲雀丘小学校や第四中学校の統廃合が決まった。今から次を考え始めて、おそらく3年、4年ぐらいかけて決まっていくが、10年後にそこをやろうと思って進めていくスピードではちょっと間に合わないのではないかなと思っている。

やはり子どもたちがこんなに数が少なくなっている中で本当にいいのかという危機感を持っているため、そういう話をしていてもいいのではないかなと思っている。単独建て替えもあれば、今地域の他のいろいろな機能と複合化するという、そういう一般的な話でもいいため、どこかで試してみてもいいかなという感じはしている。

久保田市長

今、少子化がものすごいピッチで進んでおり、今の18歳人口、二十歳の集いで案内を出しているのが大体480人ぐらいである。ところが、昨年一昨年と誕生した赤ちゃんは240人ぐらいである。つまり半分である。その240人ぐらいの子どもたちが、あと5年ぐらいすると小学校に入学する。今後その240人が、反転して増えるか、増えるべくいろいろ取り組んではいるものの、そんなに大きくは増えない。そうすると、ざっくり言うと今の子どもたちの半分ぐらいの人数になる可能性がある。そうした中であって、一方では老朽化する学校をどうするのということがある。ちょっとその辺りは併せて考えないといけない話である。

それからもう一つ、都会と違って市の面積が広いため、統合といっても簡単ではない。

ちょっとその辺りは、藤井課長、いかがか。

藤井課長

今、令和7年度と令和8年度で浜田市全体の公共施設の再配置計画を検討されていると思うが、その中にも学校が入るということを知っているため、そこを見ながら、教育委員会としても考えていくことは必要かなと思っている。

岡田教育長

今日、少しテーマもいただいていると思うため、事務局の方で預らせていただいて、また決めさせていただいたらと思う。

久保田市長

この問題は、浜田市としても避けては通れない大きなテーマであるため、今後、学校の建て替えをどうするかという、あるいは再編をどうするかということも含めて考えなければいけないため、まずこの場でちょっといろいろなディスカッションをするのは意義があるかなと思う。

ではその辺りで、事務局で腹案を考えていただければと思う。

藤井課長

次の開催予定時期はいつ頃を考えているか。

現在のところ、第2回としては、年明けの1月頃はいかがかと考えている。

久保田市長

1月頃ということだが、いかがか。

それまでに、どのようなテーマでやるかということを考えて、委員方にこのテーマで議論したいということが打ち合わせできるようにお願いする。

そういうことでよろしいか。

各委員

了承。

久保田市長

以上が予定した部分だが、委員方から何かあるか。

各委員

特になし。

久保田市長

それでは本日の総合教育委員会は終了とさせていただきます。

ありがとうございました。

終了 17:22